

東大寺山堺四至図について

建造物研究室

はじめに

正倉院御物天平勝宝八歳の東大寺山堺四至図は、早くから伽藍図及び地形図の資料として、あるいはまた絵画資料として広く知られている。この図の写しが「東大寺領定図」として東大寺図書館に保存され

ており、最近調査する機会があつた。また図に含まれる区域について、実測調査を昭和34年以来断続的ではあるが行なつてているので、そのうち天地院、香山堂について概略を報告する。

領定図

領定図は勝宝図の精度のよい写しとされている。領定図は縦(南北)2.98寸、横(東西)2.23寸あり、西の方より76寸の所と、そこからさらに72寸の所、さらにまた75寸の所に破線が南北に描かれている。これは麻布をつぎ合わせた縫目と思われる。

図には方眼が割してあるが、すでに知られる如く南北方向と東西方向ではその縮尺を異にする。図中の東大寺の建物配置を東大寺旧境内実測図と照合すると、南北と東西の長さの比は三対四となる。山岳部ではさらに縮尺をかえてあらわしている。図に含まれる実際の距離は南北3km、東西3.3kmであり、これを前述した麻布に、南北をほぼ生かして東西をおしこめたためである。しかし縮小率をかえながらも、河川、道路およびそれ以外の山岳部においても現地形とよく合致する。また図の左上方(西北隅)に「天平勝宝六年十月」と記入されている。図は、かなり褪色しているが、山膚はうすずみ、川は黄、道は茶、

第1図 寺中寺外縦絵図 部分(模)

第2図 天地院跡地形実測図

築地は黒の輪郭に桃色、建物はオリーブ色（屋根は瓦葺には縦線を入れ檜皮葺と区別する）に着色している。

さらにまた図には一堀染谷より時計廻りに十堀寺道に至る10カ所の地点名が記入されている。これは東大寺寺地を決定する界線を示すと同時に、その区域を淨域と見て俗界と区別する結界の標識点と考えられる。^(註1)

3 天地院

『東大寺要録』卷第二に

天地院縁起云行基_二和銅_三之比供_二養天地院_一之日此山麓帝皇建_二立

大寺_一

とあることから、天地院は東大寺の東の山中にあると考えられる。同じく卷第四には

一 天地院_二法蓮寺_一

縁起文云是文殊化身行基_二建立也_一：

於_二御笠山安倍氏社之北高山半中_一始造_二和銅元年_一二月十日戊寅

山峯一伽藍_二即天地院名_一法蓮寺_二……

とある。これによると、後述するように、春日山の東南方香山堂のある高山の中腹に天地院が存したと解される。あるいは飛躍するかも知れぬが、勝宝図にある「南北度山峯」(第4図)を固有名詞と考え、山峯の一伽藍を、この「南北度山峯」にある伽藍と考えられなくもない。

天地院が和銅元年に行基によつて「山峯の一伽藍」として造られたことを一応信用するとしても、勝宝図に、後述する香山堂が堂や井泉

を含めて明記されているのに対し、その位置を「御笠山安倍氏社北高巣半中」とあるだけで、そのほかははつきりと記していない。また勝宝図には羅索堂の東南に千手堂が描かれているが、それが天地院のものとも記入されていない。

さらにまた和銅元年創建以後の天地院については要録に延暦十七年(798)、貞觀十八年(876)の記述が見られるが信憑性に乏しく、天喜元年(1053)九月廿日の条に、

未時南面有三五間桧皮葺堂等并仏像一燒亡并有三小三間桧皮葺堂同以三燒失出_レ仏像云々

とあるに至つてはじめて内容が具体的となる。

このように平安中期以前については天地院の存在を明確には立証できない。がしかし天地院の闕伽井が、古くからあつた法華堂の千日不

断花の行法に關係があることなどを考

慮すれば、にわかに断じ難い問題である。^(註2) この問題は別にして、ここでは天地院に関して、江戸時代のものである

か もつとも信頼のにおける東大寺藏寺中寺外總絵図(第1図)と地形実測図(第2図)とを照合することによつて、その位置及び規模の推定を試みたい。

第1図に示す寺中寺外図には二月堂の後より天地院の堺まで98間と書いてある。1間を六尺五寸として二月堂か

第3図 下の井泉 神社神鳴

ら東へ98間とつた所は、丸山の頂上を通る線に当り、またこれは地形実測の際東大寺の東を限ると思われる石標が南北方向に何本も埋設された線に一致する(第2図)。これを天地院の西限と考えると第2図に示すように天地院の西大門跡とおぼしき平坦地がこの線上に見られる。さらに丸山の東方に海拔205mから208mで南北約50m東西約60mほどの3000m²の平坦地があり、八講堂跡と推定される。

また推定西大門跡から東へのぼると水源地に至り、東西約20m南北約50mの台地があり、さらにその西下方に約15mに30mの台地が2段になつており、ここが北室跡と考えられる。

第4図 天平勝宝八敷図 部分(模)

第5図 香山堂跡地形実測図

西限はよいとして、東限について寺中寺外図に示す間数「此峯ヨリ二百十間」を測ると、現在「一千本などと呼ばれる桜の名所」と、天院の石碑の立つてゐる所を通り、闊伽井山と呼ばれる位置に達する。これが東限と考えられる。

このように推定し得ても、たとえば要録に云う千手堂と寺中寺外図に示すものは、屋根の形式ならびに位置の点で相容れないという問題はなお解決されない。

4 香山堂

新薬師寺の北を通つて春日奥山ドライブエイに入り、新若草ドライブエイとの合流点のすぐ手前に朱塗りの祠がある。そこから約100mほど山に入るとまた祠がある。春日神社末社鳴神神社である。このすぐ下に直径8mほどの井泉(闊伽井)がある(第3図)。そこからまた800mほど、山の中腹にそつて歩くとなだらかな尾根になつたところに、寺院遺跡がある。

その位置は、東に佐保川の源、東南に能登川(今の岩井川)の源が寄つた所から、山に入つたところで、勝宝図の右下方(東南隅)に「香山堂」、と書き堂が描かれてゐる場所に一致する(第4図)。

また図中の井泉は、前述した井泉によく合致する。

香山堂についてはすでに福山敏男博士、毛利久博士などが説かれてゐる。^{註8}とくに毛利博士は現地を踏査し、遺跡についても記述されてい

一帯の景観は南に高円山があり、その右手に大和平野が望まれ、左の

方には大和盆地の境をなす峰が連なつて非常に眺望のよい所である。

遺跡の現状は第5図に示す通りである。図に示すように、遺跡は5段に分かれており、さらに南にやゝ平坦な頂部をもつ独立峰があり、ここも建物のあつた跡と考えられる(第6図)。海拔444 mから442 mにかけての第一段目と、海拔411 mから439.5 mに至る第2段目以外では大きな建物の建つ余裕が見られない。第一段目には礎石らしきものがいくつかみられ、9間に4間の建物があつたと推定される(第5図)。2段目は東西約23 m南北22 mで一番広く、重要な堂があつたと推定されるが、その規模は判然としない。『延暦僧錄』の仁聖皇后伝に「皇后又造^ニ香山寺金堂」、仏事莊嚴具足、東西樓櫓影^レ帶、左右危觀虛敵、雅灑難^レ名

と記されているが、これは一段目に金堂が、段目には廊とおぼしきもの

があり、その前方の左右の尾根に若干の礎石が認められるので、これが「東西樓」に相当するものと思われる。この遺跡の全面的な発掘調査が待たれる。

最後に1段目西よりの溝で表面採集した瓦について少し触れておく(第

第6図 香山堂跡より南方を望む

7図)。採集した瓦はすべて破片であり、

鬼瓦1点と軒瓦12点

である。これらは大別して、軒丸瓦2型式

式、軒平瓦2型式にわけられ、いずれも平城宮跡出土のものと同型式である。また

これらの瓦が、法華寺及び平城宮東辺部に多くみられるものと同型式であることは、興味深い。

附 ⁶ 本稿の一部は、昭和41年度科学研究所費「地形調査による東大寺天地院の復原的研究」の援助によるものである。

註

- (1) 森蘿、牛川喜幸「寺地と結界の種々相」奈良国立文化財研究所年報1966
森蘿「結界の立地的考察」南教仏教第10号昭和42年

- (2) 森蘿、「地形から観察した春日山の文化」奈良文化論叢昭和42年
森蘿、牛川喜幸「阿伽井及び阿伽井屋について」奈良国立文化財研究所年報1965

(森蘿、牛川喜幸、伊東太作)

第7図 香山堂跡の瓦類